

今こそ読む この1冊

潮木守一

桜美林大学大学院招聘教授

竹内 洋 著

『大学の下流化』

(2011年NTT出版)

議論は中身を読んでから

関西弁を使える人はつくづく得だと思う。「現役の学部長がこんなことを書いていいんですか」という記者の質問に「事実だからやなあー」と軽くいなしている記事を読んだ。しかも著者の笑顔の写真つきで。ところが関東弁ではそうはいかない。先日も高齢者ばかりの会合で、この本のタイトルをめぐって喧嘩が起こった。「だいたいタイトルがけしからん」と憤懣やるかたないのは、ノーベル賞直前までいった元教授。喧嘩の相手は民間企業の元役員。元役員氏がつい口走った「大学なんて昔からそうだったじゃないの」というセリフが喧嘩のきっかけとなった。二人とも高校時代は、一二を争うライバル同士だったから、雰囲気は険悪そのもの。大学受験では二人とも名門大学に順調に合格。周囲も「まあ、あの二人なら」と当然の結果と受けとめた。ところがその先が分かれだした。4年後に二人ともに大学院を受験したところ、元教授は合格。元役員は不合格。それで民間企業に進路を変えた。それから頑張ったのか、運が良かったのか、ともかく役員まで上りつめた。

元教授に言わせれば、「俺は寝る時間を惜しんで研究をしたんだ。それに引き換え、お前たちはゴルフやっていただけじゃないか」。元役員氏は「そんなことを言っても、ノーベル賞まで行けば、たいしたものだが、今じゃ唯の元教授じゃないか」。年寄り同士の喧嘩口論はだんだん不穏になってくる。その雰囲気を察して、そばの者が「まあ良く読んでから議論したらどうかね」と言ったところで、二人とも表紙を眺めただけで、中身を読んでないことが露見。大爆笑のうちに喧嘩は収まった。

現代の学生像を映し出すエッセイ集

この本は著者の最近のエッセイ、時論、図書紹介、読書記録などを集めたもの。長々しい本とは違って、短



文だから内容が濃縮されていて、エッセンスがよくみえる。特にこの著者の選本が見もの。最近では出版点数ばかり増えたので、選ぶのに苦労する。この本のおかげで読みたくなった本が一挙に増えた。

もう一つの特徴は著者の人物に対する好奇心。書評、時論を通じて、さまざまな人物像が描かれている。なかでも面白かったのが、池田真理子氏との対談。歳の近い世代同士

の話だからぴったり呼吸が合っている。「全共闘運動は、教師に対する家庭内暴力のようなもの」と発言を引きだしている。あの頃は何でもかんでも社会が悪いという「社会問題」化した。当時の学生はよく貧乏自慢をした。しかもその自慢は「何日、お風呂に入っていないといった不潔自慢」。ところが「今の時代は精神病自慢が横行している」という。確かに最近では「個人問題化」の時代になったらしい。責任は当人の「こころ」にあるという臨床心理的な問題に翻訳されるようになった。世の中の変化は速い。

秋葉原無差別殺傷事件にしても一頃だったら、当人を長年失業状態に放置した世の中が悪い、いつまでも正社員にしなかった企業が悪いといった「正論」が横行したことだろう。ひとしきりああでもない、こうでもないという評論が飛び交って、最後は「彼一人の問題としてではなく、みんなの問題として考えましょう」という、無気力な決まり文句で終わるのが普通だった。ところが、今回問われたのは、当人の事件発生当時の精神状態、当事者能力の有無だった。

タイトルにつられて「大学ダメ論」、「大学叩き」を期待した読者には残念だが、この本はそういった類の本ではない。著者の発想の多面性、コトバの多彩さを楽しむための本である。現役教授だから現代の学生の実態をよくつかんでいる。著者が折に触れて書いたエッセイ類が、オムニバス映画のようになって、今の時代を映しだしている。